

(大正五年四月六日第三種郵便物認可) 昭和十一年八月廿五日印刷納本(毎月一回一日發行)

哲 學 研 究

第 九 冊 第 一 十 二 卷



第 二 百 四 十 六 號

11.10.7.

昭和十一年九月一日發行

知覺論 第一部 ゲシタルト心理學.....

文學士 土井虎賀壽

アウグステイヌス『神の國』の歴史觀.....

文學士 松村克己

歴史に於ける辨證的と産出的.....文學士 由良哲次

京 都 帝 國 大 學 文 學 部 內 部

京 都 哲 學 會

京都哲學會規則

- 第一條 本會ヲ京都哲學會ト稱ス
- 第二條 本會ハ廣義ニ於ケル哲學ノ研究及其普及ヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ事業ヲ行フ
- 一、毎月一回研究會ヲ開ク
- 一、毎年公開講演會ヲ開ク
- 一、毎月一回哲學研究ヲ發行ス
- 第四條 本會事務所ヲ京都帝國大學文學部内ニ置ク
- 第五條 本會ノ事業ヲ經營スル爲メニ左ノ役員ヲ置ク
- 一、委員(若干名)京都帝國大學文學部哲學科教官及委員會ニ於テ推薦シタル者ヲ以テ之ニ充ツ
- 一、書記(一名)委員會ニ於テ囑託ス
- 第六條 本會ノ趣旨ニ賛同スル者ハ何人ニテモ會員タルコトヲ得
學校、圖書館、教育會、其他ノ團體ハ其團體ノ名ヲ以テ入會ス
ルコトヲ得
- 第七條 會員ハ會費トシテ年四圓四拾錢、前後二期ニ分テ前納
スベキモノトス
- 第八條 會員ハ本會ノ諸種ノ會合ニ出席スルコトヲ得、且ツ雜誌
『哲學研究』ノ配付ヲ受ク
- 第九條 本會規則ノ改正變更ハ委員會ノ決議ニ依ル

京都哲學會役員

委員

文學博士	天野貞祐
文學士	岩井勝二郎
文學博士	植田壽藏
文學士	白井二尚
文學博士	小島祐馬
文學博士	木村素衛
文學博士	九鬼周造
文學博士	田邊一元
文學士	中井正一
文學士	西谷啓治
文學博士	野上俊夫
文學博士	羽溪了諦
文學博士	波多野精一
文學士	服部英次郎
文學博士	本田義英
文學博士	山内得立

前 號 目 次

<p>物心の關係に就いて (承前)……………</p> <p style="text-align: right;">工學博士 上田大助</p>	<p>世界觀の社會學 (承前)……………</p> <p style="text-align: right;">文學士 權 俊雄</p>	<p>「理念型」構成の論理……………</p> <p style="text-align: right;">文學士 安田行雄</p>
--	---	---

會 告

一、本會へ入會希望者ハ京都市西洞院七條南内外出版印刷株式會社内京都哲學會宛テニ規定ノ會費(前表紙裏ニアリ)御納付ノ上御申込被下度候
 二、會員ニテ轉居入退會等(編輯事務以外ノ一切)ノ事務ハ内外出版印刷株式會社内京都哲學會へ御通知被下度候
 三、會費ハ振替口座大阪三〇六六三番 内外出版印刷株式會社内京都哲學會宛テニ御拂込被下度候
 四、本誌ノ編輯ニ關スル通信及紹介、新刊書、寄贈雜誌等ハ凡テ本會宛テニ御發送被下度候
 京都帝國大學 文學部内 京都哲學會

註 文 規 定

◆ 會員にあらざる購讀者の御註文及び廣告に關する件は内外出版印刷株式會社へ御申込下され度候
 ◆ 本誌の御註文はすべて代金郵税共前金にて御送り下され度候
 ◆ 振替貯金にて御送金の際は(振替大阪三九三一番東京三九三一番)内外出版印刷株式會社宛に願上候
 ◆ 前金切れの場合に「前金切」の印章捺捺致すべきに付直に御拂込下され度候
 ◆ 特に請求書及領收書等を要する場合に郵券參錢御送付下され度候

定 價

冊 數	定 價	郵 税
一冊	金四拾錢	金壹錢
六冊(前金)	金貳圓四拾錢	金壹錢
十二冊(前金)	金四圓八拾錢	金壹錢

廣告料 一頁 金參拾圓 半頁ハ取扱不申

昭和十一年八月廿五日印刷納本
 昭和十一年九月一日發行 第二百四十六號 第二十一卷 第九册

京都帝國大學文學部内

編輯者 京都哲學會

有代表者 服部英次郎

發行者 須磨勘兵衛

印刷者 須磨勘兵衛

不許複製
 禁 轉 載

印刷所 内外出版印刷株式會社
京都市西洞院七條南入

發行所

京都市下京區西洞院七條南 内外出版印刷株式會社

振替口座 大阪三九三五番
 穴版三九三一番
 東京三九三一番

本社 京都市下京區西洞院通七條南入
 販賣所 京都市日本橋區室町四丁目 内外出版印刷株式會社

賣捌所 (東京) 寶文館 東海堂
 (大阪) 北隆館 上田屋
 (神戸) 寶文館 盛文社
 (京都) 共盛社 川瀬書店 參文社

井島 勉 著

(西哲叢書
第十三冊)

ギンケルマン

頁 二八五 挿畫 三葉
價 一、三〇 送 一四

ヘーダーの文章を通じてギンケルマンの人物に親しみ、或は彼の主著「古代美術史」を繙いた人もあつたであらう。しかしギンケルマンの思想が全體的に國語によつて語られ、その歴史的地位と現代的意義が明かにされることは全く別のことからである。蓋しかくしてこそ彼の思想が我々の地に根を下し、そこに生育を續け得るのであるから。且つまたギンケルマンはギリシヤ美術を通じてギリシヤ精神をドイツに移植した最初の人である。彼があつてこそレッシンクやゲーテの代表するドイツ古典主義は開花し、結實し得たのである。「自己の天性の中にギリシヤ精神の理解への鍵をもつてゐた」この「近代のギリシヤ人」とつては、自らが生きる時代は心を感められない異國であり、ギリシヤの文化こそ正に人の常に立返るべき故郷であつた。古典に返ることは即ち時代に先んずることであり、歴史を超えることは歴史の中に生きることであつた。しかしギンケルマンは「ギリシヤの發見者」としてその一般文化史における地位を確立したのみならず、また「古代美術の理想を考察することによつて、藝術作品及び藝術史の理念を見出した」美の發見者である。この意味において、最初の偉大な美術史家はまた同時に近代美術の創始者と認めらるべきである。蓋し、著者のいはれるやうに、美學は藝術と哲學との結合によつて構成されるべきではなく、藝術的體驗自體の哲學的自覺に本づいて成立すべきものであるから。古典と藝術的事象自體への復歸が切實に要求される現代において、我々がまづ就て學ぶべきは「氣高い單純と靜かな偉大」の觀照者ギンケルマンである。そして確實な資料に依據せる客觀的敘述と明快犀利な分析によつてギンケルマンに關する決定的モノグラフイとして保證された井島氏の勞作は、「藝術を觀る新しい眼を開き」人を「何物かにする」力をもつてゐる。(服部英次郎)

近刊 近代フランス美術と支那趣味

小林太一郎著

五〇七一 阪大振・町太丸町寺都京
九〇九三五京東振・臺河駿田神京東

弘文堂



(大正五年四月六日)昭和十一年八月廿五日印刷納本(毎月一回)
第三種郵便物認可)昭和十一年九月一日發行(一日發行)

哲學研究 第二百四十六號 定價金四拾錢

郵税金壹錢